
Cafe 「Recolleglass」

七海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C a f e「R e c o l l e g l a s s」

【Nコード】

N 8 1 0 0 M

【作者名】

七海

【あらすじ】

駅裏通りの喫茶店。人が来ては離れていく。

ゆったりとした時間は喫茶店の中に流れ、それらは店内を流れる記憶と変わり、記憶はまた緩やかに時間へと変わる。

思い出時計、R e c o l l e g l a s s に――

前置きはさておき、喫茶店の日常を不定期に書き連ねるといっただけ

のお話です。山なし落ちなし意味なし注意。

友人のキャラクターたちをお借りしているため、必ずしも友人のキャラクターそのものとは行きませんが出来るだけ再現したいと思います。

開店（前書き）

あらゆる線がまとまり、一つになる駅。

そんな駅のすぐ傍の裏通りに、すこし変わった喫茶店があるのです。

店は一杯になったことはなく、静かな喫茶店。

夜はお酒も出しますが、人気メニューは店長の作る各種スイーツ。

駅が電車が集まる所なら、この喫茶店は変わり者の集まる所、店長からして変人なのですから。

開店

「・・・暇だ」

客のいない喫茶店のカウンターに突っ伏して呟く青年。

呟きがウエイトレスと青年しかいない店内にむなしく響く。

黒い長袖のシャツと、黒いズボン。体の影から覗くエプロンで、辛うじて店員と分かるほどだ。

その青年の肩を叩き、起き上がらせようとするウエイトレス。

しかし中々起き上がらない青年の背中を引っ張って、やっと起き上がらせる。

『神崎さん、起きてください。お客さんがいないからってダれてないで』

青年の前にそう書かれたスケッチブックのページを突き出す。

「そうは言うがな、カオルちゃんや。オジさんは今日の分の仕込みで3時間しか寝とらんのよ。

どーせお客なんてあんまり来ないんだからいいじゃない」

べしっ。軽い音が響き渡る。

「・・・カオルちゃん、スケッチブックは割と痛いよ」

『こうでもしないと起きてくれないじゃないですか。』

どこにもーニングセットも用意しない喫茶店があるんですか』

さらさらと持っていたマジックでスケッチブックに書いて見せるウ
エイトレス、カオル。

「ここにいる」

ゴンツ。

「カオルちゃん、縦はヒドい」

カオルはその言葉を無視してスケッチブックとマジックをエプロン
の大きなポケットに仕舞う。

内心カオルも不思議に思っている。こんな店長でこの喫茶店がよく
潰れないものだ。

「本の背表紙で殴ると痛いんだぞー・・・」

店長らしからぬ青年―神崎 幸―は立ち上がり、頭を掻きながらカ
ウンターへと戻る。

数度欠伸をし、大きく伸びをして

「さて、今日も適当に頑張りますか」

と言ってから、カオルの視線から目をそらした。

その日は午前中、一人も客が来ることは無かった。

カオルはもう慣れたと心の中で呟きながら嘆息する。週に1、2度
はこんな日だ。

夕方にもなれば酒目当ての客も来るんだろう―そう思いながら店長の顔を眺める。

どこか抜けたような表情で窓の向こうの人通りを眺めているその顔からは想像できないほど、

コウという人間は多芸なのだ。

喫茶店のメニューはほとんど彼が作っている。コーヒー豆のブレンドも彼がやっているし、

人気のスイーツも彼が作り、酒を出す時間帯になればシェイカーを振ってカクテルも作る。

カオルは時々不思議に思ってしまう。一人で何でも出来るのに、何故自分を雇ったのか。

必要だったとしても、喋る事の出来ない自分である必要があったのか・・・と。

「んー・・・カオルちゃん？」

いつの間にか窓の外に向けていた顔をこちらに向け、コウは笑っていた。

「お客来ないけどお昼になったし、休憩しよっか？今ご飯作るから待っててね」

そっというが早いか、キッチンへと引込むコウ。

―そっいえば接客しているのと、こうやってカウンターに座っているのとどっちが長いだろう？―

カオルはそんなことを考えながら、磨かれたコップに水を注ぎ、フオークを取り出す。

フオークを並べ終え、カウンターに座りなおしたちょうどその時、皿を2つ持ってコウがカウンターに戻ってくる。

「今日のお昼はナポリタンだよー」

カオルの隣に座り、自分とカオルの前にナポリタンの盛られた皿を置く。

コウがフォークを手に取ったのと同時に、ドアが開いてカランカランと鈴の音が響いた。

「いらっしやい、好きな席へどうぞ」

フォークを手放すが早いか、コウはカウンターへと入ってお冷を用意する。

ゆつくり、すこし戸惑ったような様子で店内に入ってくる今日始めてのお客は少女だった。

大きな白い帽子を被り、顔にあっていない大きなサングラスと、同じ様にあっていない、

胸元以外はダボダボのパーカー。胸元だけは、逆に形が強調されている。

そう、胸だけは。それは外から見ただけでも「巨乳」の域を超えていた。

カオルは無意識に自分の胸に手を伸ばす。数度ぺたぺたと自分の胸に触れ、そして嘆いた。

「ほい、カオルちゃんオーダーよろしく」

その一言で正気に戻ったカオルは、お冷を少女の元へ運ぶ。

『いらっしやいませ。ご注文をどうぞ。』

私は喋る事が出来ないので、筆談で失礼させていただきます』

スケッチブックの1ページ目をそのまま見せる。最初の数ページは
お客への応対が書かれていて、
大体その数ページで事足りる。たまにあるナンパはコウに任せてカ
オルは笑顔で逃げるのだが。

「ひゃい。え、えーっと、えーっとですね・・・」

メニューを広げて覗き込む少女。胸がジャマでちゃんと読めていな
いのだろうか？

「スイーツですね・・・えーい、全部お願いします！」

「全てのスイーツを一つずつ、ですか？」

「はいっ、お願いしますー。あ、あとアイスマルクも！」

「分かりました、少々お待ちください」

オーダーを取り終えてカウンターにオーダーを出し、そこでやっと
カオルは手が止まる。

「全部・・・だって？」

聞き間違いじゃないはずだ。全部だなんてそうそう聞かない。

「店長、今の聞こえてましたよね？」

「おう、全部だなんて随分甘い物好きなんだな」

「そこは普通に流していい所なんですか！？」

オーダーを取ったカオル自身ですら半信半疑である。だがコウはま
ったく気にしてないという風に
パフェを作り始めた。

「カオルちゃん、冷蔵庫に朝作ったケーキあるから出してあげて」

頷いて冷蔵庫からケーキを出し、皿に乗せて少女の下へと持っていくカオル。

「わぁ・・・美味しそうですー・・・！」
『ごゆつくりどうぞ』

ケーキに夢中な少女を見て、見せる必要もないか、とカオルはスケッチブックを仕舞って一礼し、カウンターへと戻っていった。

「もぐもぐ・・・はふう、おいしいー・・・」

幸せそうにパフェを頼張る少女。まるでグルメ番組のリポーターのように美味しそうに食べるな、とコウは呟いた。

カオルもその点には同意していた。既にスイーツのフルコースを3周食べ切っているのを目の前で見なければカオルも食べなくなっていただろう。

お客は相変わらず一人だった。それが逆に今は助かっている。休み無くスイーツを二人がかりで作りながら他の客を相手に出来るかどうか怪しい。今日の店員は二人きりなのだから。

「んー・・・はふ、ご馳走様でした」

スイーツのフルコースのストロベリーパフェのお代わり、パフェだけでも16個目になるそれを最初と変わらぬペースで食べ終えた少女は、やっとスプーンを置い

た。

「お嬢さん、凄いな？ウチの常連でもこんなに食べた子はいないさ」
「はわっ、そ、そうですか？」

少女がコウの方を振り向いた拍子に、サイズの大きすぎるサングラスが顔から外れ、床に落ちる。

「っ、ひゃうっ！」

サングラスの外れた少女の顔には二人とも見覚えがあった。今テレビで一番見かける顔と言ってもいいだろう。

ラピス・ラズリ。4年前のデビューから今まで長く安定した人気を誇るアイドル。

少し抜けたような天然キャラと、アニメキャラのような可愛い声。そして、3桁をゆうに超えるバスト。

『・・・ラピス・ラズリさんですね』

「あうっう・・・お忍びだったのに・・・」

なんでも、よくこうしていろんな喫茶店やケーキ屋を探しては食べ歩いているらしい。

「ラピスさん・・・でいいのか？ココはたいした喫茶店でもない。客もあんまり来ないし、

いつでも来てくれていい。一人のお菓子好きとしてもてなすよ」
「いいんですかあっ！？」

子供のように目がキラキラと輝いている。カオルは思った。天然はキャラじゃないんだらうな、と。

「えと、えとえと・・・じゃあ今度はラピス・ラズリじゃなく、神代天音として来ます！」

天音の満面の笑みは、確かにアイドルのそれだった。

天音が帰った後、カオルとコウはキッチンで皿洗いに追われていた。

「いやー、しかし凄い量だったな。まさかフルコース食べ切るとは思ってたかったから

足りるかちよっと心配だったよ」

カオルはその言葉に頷きながら皿に着いた洗剤を洗い、乾燥機に入っていく。

「じゃ、俺はお客待たせてるし戻るよ。手が荒れないようにほどほどで終わっていいから」

コウはそれだけ言って、手を拭きながらカウンターへと戻っていく。

『・・・今度から常時3人シフトに入るように提案してみようかな』

天音がまた来た時に対応しきれないだろうし、と一人ごちてカオルは水道の栓を締めた。

開店（後書き）

はい、初投稿です。七海です。

どうしたもんですかね、この乱文。

書いてる途中で話の方向が変わるような気がして自分からわからない・

・

ご意見ご感想、特に指導をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8100m/>

Cafe「Recolleglass」

2010年10月11日04時14分発行